

新しい自分を求めて

魅 惑

2 回生37代 北里 幸豊

探検部入部以来、いろんな場所で合宿をし、生まれてはじめての経験をたくさんしてきた。本格的な山登りをし、雪山でテントを張って寝るというのがはじめてのことなら、川下りをしてみて、岸で見るのと、実際下るのとでは、これ程までに印象が違い、川というものがいかに激しいものかを知ったのははじめてのことであった。沖縄の陸の孤島で合宿をしたときは、食べ物のありがたさが、しみじみと分かったし、洞窟に入ったときは、生温かくて、狭い迷路のようなところでコウモリを見ながら、これこそこの部でしか体験できないものだ、とワクワクした。

探検という言葉には興味があったが、別に何か行動を起こすわけでもなかった（というか起こすことなどとうていできなかった）自分が探検部に入って、自然を相手に活動することが、怖い面もあって、多少手間もかかるけど、実はこれほど楽しいことはないということを身をもって知るときは本当に嬉しい。

探検を考えるとき

2 回生37代 徳大寺 珠子

92年12月から93年1月にかけて私は初めて冬

山に登った。1回生の冬休み。大晦日の夜、紅白歌合戦が流れるテントの中から外に出たときに見た夜空は、私の心の中にはっきりとした映像として残っている。

月や星に照らされて、フワリとその真っ白な姿を現した山々。そして、それらを照らしている月や星も、黒い宇宙のなかで白く輝きこちらに光を送っている…。

夏山や他の合宿で見る夜空も綺麗だけれど、この時見た冬山の夜空はいつもと違った、柔らかで無垢な、そんな美しさを持っていたように思う。

「どうして山に登るの？」時々そんなことを聞かれるが、その理由は様々にあるにせよ、山のもつ自然の表情や景色を見たいから、というのもその理由の1つに当てはまるだろうと思う。またこのことは山に限らずどのような土地、世界にでも当てはまるだろう。

自然というものは様々な表情や美しさを持っている。特に、私たちはそれを写真やテレビ、映画などの映像を通じて目にすることが出来る。また本を読んだり、人から伝え聞いたりすることによっても、その美しさを知ることが出来るだろう。私たちは自然の美しさを知識として得ることが出来る。だがそれだけでは物足りない。

目で耳で得た知識を、今度は実際にそこに足

運び、自分自身の体験として身に付けたいと思うだろう。

目で耳で知った様々な世界に憧れ、行ってみたいと思い、そして実際に行ってみてその世界を体全体で感じることに、それが探検という言葉を考える時の私なりの答えであるように思う。

Someday

2回生37代 戸谷 真一

《過ぎ去った時に心わずらわすな

未だ来ぬ日に思いをめぐらすな

今この瞬間から歓喜を奪え…》

今年も多くの一回生が入部してきた。そんな彼らの姿を見ていると、自分が一年前、探検部の扉を打いた時の事が思い出される。大きな野心があったわけでもなく、有名な探検記を読んで感動したからでもなく言ってみればただ「何かおもしろそうだったから」という理由にすぎなかった。こんな調子で入部したものだから、見るもの聞くもの初めてのものばかりでこの探検部の雰囲気にも違和感を抱かざるをえなかった。普段の自分なら、違和感から自然と遠ざかろうとするのが常だったが、その時の自分は、この違和感よりも、はるかにこの探検部に魅かれてしまっていた。それから一年、決して優秀な部員ではなかったが、自分なりに頑張ってきたと思う。その間、自分にとっての探検とは、その魅力とは、何なんだろうと、色々考えてみるのだが、その度に使い古された宣伝文句のような言葉が浮かんできてはもう1人の自分が、

そんなじゃないと否定する。そんな事を繰り返しながら、今だに何ら答えらしい答えは出ていない。これまで色々な合宿に参加してきて、その度に確かに、これだと感じられる何かがある。しかし、その何かを言葉にしようとする、自分のボキャブラリーの為か、口から出たり、紙に書いたりした先から嘘になってしまうように感じられてならなかった。その何かが形になるのが、いつなのかは分からないが、今はとりあえず一日一日を全力で生きる事が、その“いつか”にたどり着く一番の近道のように思う、今日この頃だ。

探検部に入って

2回生37代 小柴 直子

私は見たところぼーっとしてトロトロしたコだと思います。そんな活発そうな子にも見えないし、実際トロいので、友達にも「探検部に入って、山や川や洞窟に行った」というと驚かれ、次に「なんでそんな部に入ったん？」と聞かれる。

自分でもそうはっきりとした入部動機はないので答えに一瞬つまり「おもしろそうだったから……」「なんとなく……」といった答えを返しお茶を濁すといった感じである。

入部した時からいつ辞めるかいつ辞めようかなどと心の中で繰り返し迷いながら1年たってしまったようでもある。

思い返せば新歓合宿から秋合宿ぐらいまで泣かなかった合宿はなく重いザックや自分のいたるなさで思いっきりブルーにもなっていた。でもそんなことも今ではすっかりいい思い出と

なりまたこれからも続いていくことだろうとも思う。

“探検”ということの意味を考えるとこれもまた、私には難しい問題である。一般のイメージとして人跡未踏の地を求めることのようにあるが、自分にとって未知の世界を求めてゆけばよいだろうと納得している。

これまでの合宿ではほんとうにいろんなパートの合宿、山・川・洞窟・踏破1回ずつぐらい参加してきた。いろんな経験ができたし、楽しいことも多くあった。連れて行って下さった先輩方にも感謝しています。

何の分野に重点を置くかはまだ思索中である。4年間という期間のうち実際活動できるのは、あと2年もないくらい短い時間。有効に使い、いろんなことを吸収してゆきたいものである。

探検活動に必要なもの

2回生37代 高木 誠徳

我々の活動にとって絶対なくてはならない事がいくつかあると思うとですよ。まず第1には好奇心が挙げられるんじゃないかなですかね。変わった所とか行っことがなか所に行きたかーと思わん事にはこげんきつか事はできんと思うとですよ。第2には体力。第3は金力。といってもうちの部には貧乏人が多い気もするとはってんね。次に知力。これも単位の獲得数から考えるとあやしい。そして最後は、マゾッ気ではないだろうか。そんな事は伺いたかと思えば、夏山のひもじさ、冬期のボート合宿、それに比良歩荷や外苑合宿（まあ誰も砂やらかつぎたくはなか

ちゃー言うとうとですばってんがね。それに海上自衛隊の友人いわく、そげん事がしたかったら陸自に入れとか言うとりましたばってんね。）を思い出してもらえれば参考になると思います。だいたいきつか合宿の方が面白かとか言うて厳しい条件ば搜して、行ったりするし、酒ば飲んだ時に出る合宿の話の中で一番笑えるとは外苑合宿の事やし、これはどう見てもマゾッ気の表れとしか思われんとですよ。好奇心やら挑戦精神やら言うたっちゃ絶対に、精神学的に言えばマゾヒズムの表れと思うとですよ。と、言うわけで以上5つの事が必要不可欠であるち自分は思うとです。

最後に一句

外苑に

マゾ気持ちこみゃ

俺の勝ち

探 検

2回生37代 関谷 雅彰

僕が探検部に入ってから1年と2ヵ月ほどがたった。ところが、この文章を書く今の今まで「探検」について深く考えたことはなかった。探検部に入ろうと思ったのも、別に「探検」について、深く考えた上でのことではなく、ただ「探検」という言葉に魅力を感じたからにすぎなかった。そこで改めて「探検」について考えてみた。「探検」とはもともと世界中の土地の中で空白の部分に踏み込んで行くことであつた。しかし、昔から様々な探検家によってその空白の部分に塗りつぶされてきた。そのため現在

ではもう空白の部分がほとんど残っておらず、あっても今の自分には危険すぎて、踏みこんでゆけば生きて帰れなくなるかもしれない、といった所が多い。もし自分にとっての「探検」の定義が今のべたようなものであれば、「探検」が自分の手も足も出ない、全く縁のないものになってしまう。そこで、自分にとっての「探検」の定義を変えてしまえばよいと思う。すなわち、自分だけの空白の世界地図を作ってしまうばよい。自分に合う白地図を作れば、あとはその白地図を様々な色で塗りつぶしていくだけだ。当然、他人とは地図の形は違うだろうが、僕はそれでいいと思う。あとはその地図を塗りつぶしても塗りつぶしても空白の部分が減らないことを願うのみである。

クラブにハマっていく私

2 回生37代 池本 靖史

部に入ってもう2度目の夏が来た。「自分は今まで何をしてきたのだろう。」時々そんなことをふと考える。もし他の部に入っていれば今ごろはこんな暮らしをしていなかったのではないか。毎月のバイト代は一瞬にして合宿費、その他交際費（部員or後輩）で消えていく。たまの休みも実家に帰れず合宿。家の者からも反対されながら2度目の夏をクーラーのない部屋でうなりながら寝ている。昼間はトレ長として鬼の顔も作らなければならなかった。（そのまま性格が出ているという声が多いが）それに2度の外苑合宿と比良歩荷。これだけ書き上げるとこの部に存続するためには強力な目標ないしは魅力が必要である。そうでなければこの部に

いることは苦痛なだけである。自分はまだ海外への遠征は考えていない。他のメンバーもどれほどの夢を持っているのだろう。しかしこれだけは言えると思う。部員は全員いい人ばかりで、そんな仲間といっただけで心安まるのだと。そして最近、目の前にかすかに目指すものが見え隠れしている。この先それが現実となるのか幻と消えるのかよくわからない。とにかくアクティブに行動していかなければならないだろう。夢を現実にするために。

探検部と友人

2 回生37代 田嶋 英之

私が探検部に入部したきっかけは、私と同じ工学部機械工学科のT.T 君に探検部の話を聞いたことである。そして彼はおもしろいから、探検部に入れと私に言った。当時、どのクラブに入ろうか迷っていた私は、おもしろそうだと思う、5月の連休明けに入部した。

そんな私の初めての合宿は、外苑合宿であった。私は入部する時誰にもこのことを教えられず、私に入部を勧めたT.T 君も学校の裏で少し合宿をするだけとしか言わなかった。そのため、真相を知った時、私はだまされたと思った。そして、退部しようかとも考えたが何もせずにやめるのも、おもしろくないと思い、合宿を行った。しかし、合宿中私は何度も自分の選択を悔やんだものである。

このようにして、私の探検部の活動が始まり、今に至っている。今までの合宿では、楽しいことやおもしろいこともあったが、同時に、つらくてつまらないものもあった。それらを乗り越

え、今もやっているのは、多くの友人のおかげだと思う。もし彼らがいなければ、私は外苑合宿の前にやめていたかもしれない。多くの人と出会いにより、今私は探検部にいる。しかし、その第一歩となったT.T君とは、まだ一度も一緒に合宿に行ったことがない。

祝・コロンブス・アメリカ到達501周年

2回生37代 谷 哲也

コロンブスがアメリカを発見したのは1492年である。そんでもって今年は1993年で「1993-1492=501」というわけでちょうど501周年目というわけである。500周年であった去年はコロンブスフィーバーだったが、今年は大したことではない。しかしとにかくすばらしいことだと思う。コロンブスっていう奴は、結構悪い奴だったらしいが、まあそれは探検家としての奴の業績には関係ないと思う。「コロンブスの卵」という話があるけどオレはこの話が好きだ。まるで西洋の一休さんのようだ。コロンブスという奴はとんちがきく奴だったんだろう。とにかくコロンブスはスゴイ奴だ。探検家として、奴は超一流だと思う。ほんでもってオレも探検するならコロンブスのようにならなくちゃと思う。しかし、現在探検するようなことはあんまりない。しかしオレの探検は終わっちゃいない。これからの探検はイマジネーションの時代だ。コロンブスだってはじめからアメリカに行こうと思ってたんじゃなくて西まわりに航海したらインドにいけるんじゃないかな？とイマジネーションしたわけである。

そういうわけでとにかくコロンブス万歳！

素敵な出逢い

1回生38代 北本 悦子

幾つかのサークルやクラブを見てまわり、その続きで覗いてみた探検部。他で見てきたように何となく合宿の写真を見せて頂き、ガイダンスを受けた。そして他と同じように、「考えておきます」と言って失礼するはずだったのに、なぜか口が「入部します」と動いていた。探検部が“クラブ”だということも知らなかったし（サークルだと思っていた）どんな活動をするのかということもよく理解していなかった。野外活動の経験もなかった。なのになにいきなり「入部します」と言っていた。不思議だ。

でも、男の方々が着替え中なので部屋の外でガイダンスを受け、入部を決めた後、初めて部屋へ足を踏み入れて、一瞬、「しまった」と思った。小山ができて隙間のない机の上、雑然と四隅に置かれている（？）わけのわからない道具や物やくつ。天井からはTシャツやジャージやヘビの皮がぶらさがり、何人かの人がマンガを読みふけている。照明は暗い。部屋にいる人みんなが上回生にみえ、かつ無口にみえる。恐い。こんな所は初めてだ。緊張感が走る。しかし、もう後にはひけない、と思った。とにかく入部するんだ、と思い、新入部員のプロフィールを張っているところに名前を連ねさせて頂いた。

すると、「じゃあ、明後日から合宿やから」とおっしゃる。なんかわけがわからず「はぁ」と答える私。「今からやったら川は無理やな。装備は足りるか。トレッキングシューズもってる？」と、全く理解できない内容の話が続けら

れ、ただただ茫然としていたが、ようやく「自分も合宿に行くということになってるらしい」と気づいて、さらに恐くなった。探検部に慣れ、どういう部かわかった今ではそんなことはないが、どんな部かわからず入部し（これも無責任だが）、初めての世界にちょっとビビったその日に、「明後日出発」それも山の中に3～4泊、と言われるとやはり不安になるものではないだろうか。結局、その合宿には参加しなかった。そしてみんなが合宿に行ってる間、初めのちょっと恐い印象がどんどん広がって不安は深まるばかりだった。（命のこととか考えた）

でもとりあえずトレーニングに参加していると、またわからないことが始まった。何かの班に分けられてて、テントを張る練習が始まり、「ガイエン」がどうかという話があちらこちらで聞こえてくる。唯一理解できたのは「ガイエンは恐いらしい」ということだった。で、そのまま外苑へと流れこんでいった。

探検部って何なのか、何するところか、どんなクラブなのかわかってきたのは外苑が終わってからだと思う。で、わかればわかる程、慣れれば慣れるほど、どんどん楽しくなってきた。岩登りとか川下りとか、洗わずたべる御飯とか、テントでシュラフにくるまって寝るとか、初めて経験することへのもの珍しさというものもあるかもしれないが、私は自分がやりたい事が見つかったというか、好きな事にめぐり逢えたからだと思う。生命力にあふれ（？）頼もしくてやさしい先輩方や好奇心にあふれた目を輝かせた男のこたち。こんな輝いた人達が集まっている探検部、興味と好奇心を絶え間なく、くすぐる

探検部。こんな探検部にめぐりあえて私はとってもラッキーだ。

でももちろん、「ラッキー」だけで終わるつもりはない。この幸せな出会いが私の新しいスタートなのだ。行きたい所、やりたい事が次から次へと出てきてたまってきたから、早く技術的なことなどを先輩方から学びとり、チャレンジしていきたい。

探検部に入って

1回生38代 重歳 智子

探検部に入ったのは、探検したかったからですが、入ってみると、実際に探検する前に必要なことがたくさんあるので驚きました。探検に必要な知識が十分でないと、ちゃんとした計画がたてられないし、体力や技術がないと、計画をこなせないし、まず探検する前に習得しなければいけないことがたくさんあって、そういうことを全然考えてなかったので、自分の認識の甘さを思い知らされました。登山に例えれば、まだまだ麓で山を見上げている状態ですが、いつかは頂上に着けるように努力し続けようと思っています。

新しい世界の探検

1回生38代 田口 学

この世の中には僕の知らない世界がいっぱいある。「探検部」だってその一つだ。そこに集う人々もそうだ。知らないままで終わるものがあれば、それは残念だ。僕が動きまわる事によって、環境を把握し、そこから何か珍しい、新しいものを発見する。わからないものをしら

べてみる。すぐに解答が得られないこともしょっちゅうかもしれないが、それでもいいのである。動きまわった範囲に、「いろんなもの」があるということを発見すればいいのだから。動きまわることで、本、写真、テレビでは発見できない環境が僕の中で実体像をもつ。そのことにより、僕の世界の中は、さらに新たな世界を加えて、空間的に拡大していくのである。様々な経験と発見によって複雑化した世界を把握し、自己を形成してゆく。僕にとっての「探検」の理想とはこんなものである。近代における探検は、客観的な発見をともしなければならなかった。しかし、現代では主観的な探検、つまりみずからの体験として真実をとらえたいと思った人の冒険のようである。個人的な興味や夢を実現させるべく努力して、新たな世界観を築きたい。圧倒的な世界を直ちに感じたい。全く違う文化の人々と会ってみたい。僕にも探検の興味と夢はたくさんある。探検部での活動をとおり、自分なりの社会観、世界観、地球観を養っていきたい。

探検行為の根源に関する確信

1回生38代 野口 伸也

己がもう前へ進もうとしなくなった時は、
己が奴隷になる時だ

ゲーテ「ファウスト」

「探検」という言葉には、どこかしら魂を揺さぶるものを感じる。一種の憧れなのだろうか。私が最初にこの「探検部」という名称に出会っ

たのは、受験勉強もたけなわという、高校3年生の夏のある日、関大対策の赤本のサークル一覧表をふと眺めたときであった。とにかく私は、その名前のもつイメージ——何か未知なるものへと、己のベストを尽くし、そして達成する、このイメージ——に魅了され、入学と同時に学内探検、BOXの戸をたたいたのである。そこでこうして現在に至るまで、探検部員としての活動を続けているわけであるが、最近、「探検」とは何か、という事に関して、少し確信めいたものを持つに至った。1回生としてまだ未熟であり、このような探検行為の根源に関する重要な事を、論じたとて、先輩方にしてみれば、まだまだ浅はかであるとお考えになられるだろうが、しかし、以下に記すのは、1回生として今現在の確信であるから、おゆるしいただきたい。

さて、「探検」と、ともすると同義語にされがちであるが、やはり何かが根本的に違っているというものに、「冒険」がある。この、「冒険」と「探検」の相違という問題は、外苑合宿中、一部一回生の間で提起されたものであるが、それに対して、私は考察を進めていくにつれて、また、外苑合宿の進行につれて、探検行為の根源に深く関わるだろう、一つの確信へとつきあつたのである。その確信とは、つまり、探検とは「ある一定の、最終的な目的、目標を、意志力の持続をもちいて、為し遂げようとする行為」のことであり、冒険が、「その行為それ自体を目標」にしていることに対し、もっと奥の深いものだということである。

最終的な目標をもってする事が、何よりも探検行為の根源であり、また、他のアウトドア・

スポーツと一線を画すべき特徴であるとは思いう。ピクニックやハイキングと違う所がそこにあるわけで、それを忘れてしまうと、探検は探検でなくなってしまう気がしてならない。

近年において、探検というものが、一種のトリアスロン競技的なものへとなくなってしまっていることは否めない。しかし、私は、探検行為とは、何か新しく未知なるもの（少なくとも自分にとって未知であるもの）を、既知のものへとするという目的をもってされるべき、人類の根本的行為そのものであると思うものである。

まだ、私は挑むべき目標を見つけてはいないが、それを見つけたときが、真に探検部のBOXを見つけた時であり、その時こそ、ようやく、本当の探検部員としての活動が、はじまるような気がする。

探検部に入って

1回生38代 網岡 弘至

月日のたつのは早いもので、僕が探検部に入ってからはや3ヶ月がたとうとしていて、ようやく部の活動が理解できてきたところである。そこで今あらためて探検の目的とは何かを考えてみようと思う。探検の目的は、だれもしたことがないことをしてみたい、未開の地へ入りたい、有名になりたい等々人それぞれさまざまであろうが、僕が考える探検の目的とは、自分への挑戦や新しい自分の発見であると思う。昔、本やテレビなどで探検家などが「今度のことで自分の中で何かが変わったような気がする」とか「今度の旅は自分への挑戦です」というのを耳にしたことがあったが、本当にそんなことが

必要であり、また、ありえるのだろうかという気がしてならなかったが、今、探検部に入って、実際に活動したり、先輩方から話を聞いたりしているうちに本当にそんなことがありえるかもしれないと思うようになってきた。そしてまた僕も新しい自分をぜひ見つけてみたいと思う。最後に、何年かたって、大学を卒業するとき、「こんなにも自分は変わったのか」と思えるようになったら最高だと思う。

探 検

1回生38代 宮本 保顕

探検という言葉でまず思い出すのは、リビングストーンやスタンレーといった昔の探検家たちの名前だ。昔の探検は現代のものとは違い、未知の地域を既知のものにしていくもの（現代においても、ギアナやアフリカ中央部などまだまだ知らされていないところもあるが）、また、宗教活動や商業目的などがついてまわるものであった。彼らの行動には敬服するところも多々あるが、それに伴う破壊活動については、探検家としては、問題視すべきであろう。僕が考える「探検」とは種類が違う。

では、僕の中の「探検」とはどういうものか。それは、人間の限界に挑戦することである。人間の能力というものは、普通の状態ではほとんど発揮されていないが、自分を追い込み、限りなく無限に近い自己の能力を引き出し、己を知ることが探検ではなかろうか。子供の頃、よく探検ごっこをしたが、そういう下水道にもぐったりとか、ガケによじ登ったりとか、山の中で遭難しかけたりとかいったものではなく、今、

この探検部で行っている活動こそが真の探検であると思う。自己の限界を越えてパドルを漕ぎ、歩荷する。その中で己を発見できれば、それが探検というものであろう。

探 検 心

1回生38代 大東 正人

探検心はどこから生まれるのだろうか。思うにそれは、たぶん誰もが持っている好奇心というやつが一人歩きした時、あるいは満たされた人（不自由のない金持ち）がふと人生について考えてしまった時に生まれるにちがいない。探検のスケールは広い。今まで人々が営んだ探検活動は数知れないが、これから先に僕たちの世代、さらにはその先の世代、もっとも時代が進めばその営みもほんの一握りのものとなるだろう。だけど個人レベルで考えれば、たった一つの探検も立派にその人の探検心を充たし、人生においても忘れられぬ記憶として脳裏にきざみ込まれるであろう。結局、何が言いたいのかは分かってももらえないだろうが文章に書く難しさは分かってももらえると思う。僕の探検心は何を求めているのだろうか。次の課題はそれを見つけることである。

ぼくは、よくばりやさん

1回生38代 田中 彰

私が探検部に入ってから3ヵ月たちました。その間にいろいろ驚くことができました。いちばん驚いたのは、なんといっても外苑合宿でした。

先輩方から噂は聞いていたのですが、経験し

たことのない私には、いまいち実感がわかず、「砂を背負うぐらい平気や」なんて甘いことを考えていました。

ところが実際に合宿が始まってみると、歩荷というのは、今まで経験したことがないほどしんどいもので、それに加えて上回生からの精神的プレッシャーもあって、合宿中は不満ばかり言っていました。後になって考えれば、これからの活動に必要な不屈の精神力を養うという点で意義のある合宿だったと思います。

ただし、精神論ばかりでなく、実践的な技術の習得にも、もっと力点を入れればより有意義な合宿になったと思います。

少し不満な点もありますが、このクラブに入って良かったと思います。やりたい事、行きたい所がたくさんあるのでこれからがんばろうと思います。

探検部に入って

1回生38代 石丸 智明

「努力すれば必ず報われます」と宗教のおはなしのようなことを言い聞かされた浪人時代の私であったが——受験なんて所詮、運や運や——とかたくなに信じていたのである。

そしてそれによって今ここに存在しているのだが、こと山の話となるとそうはいかない。努力なしでは山には登れない。そしてそれがあるからこそ頂上からの眺めはよりいっそうよくするのである。それはあまりにもあたりまえのことだけれど、そのことを知ったのはこの部に入ってからではないだろうか。

今後の抱負

貴常日春 1回生38代 榊原 勝

『探検とは何か』この問いに対してここ2ヶ月、あーだこーだと様々考えてみたのだが、結局自分の納得のいくような答えは出せなかった。かといってわかったような事をかくのも好きではない。そもそも入部して数ヶ月、合宿も数える程度しかこなしていない者がこの問いに答えられるはずがないと気づいた。ではどうすればよいか？

私は“山岳”でもなく“ワンダーフォーゲル”でもなく、ましてや“at home なアウトドア

サークル”でもなく“探検”という言葉に魅かれ入部した。だから山に登るだけでもなく、はたまた川を下るだけでもなく、粋や伝統にとらわれることない、自分の興味の赴くまま、幅広い活動をしていきたい。今は合宿も先輩に連れで行ってもらい、そこで様々と学ぶことばかりだけど、上回生になったら自分で発案し、計画し、実行していきたい。そしてそれを重ねていき、いつか“自分も人間的に大きくなったものだ”と自分に酔いたい。その時になればきっと自分流の探検論を語ることができよう。

探検部 活動大関

探検部一・モビーハーハリ本日

